日本語とインドネシア語に見る「神の視点」と「虫の視点」を併せもつ言語文化の大いなる可能性について

染谷　臣道

本稿は、主語を立てなければ成立しない「神の視点」の言語文化から出てくる「自主」、「独立」、「自立」、「自律」といった観念が「虫の視点」の言語文化で可能かを問うものである。明治以来の日本は、以前の「虫の視点」の言語文化の上に西洋由来の「神の視点」の言語文化を摂取し、国家を形成し、社会を構築し、個人のあり方も模索してきた。両者は交錯し、鋭い対立を見せつつ、今日に及んでいるが、世界の過剰な「独立」を眼前にした今、そうした言語文化をもっている我々には、新たな役割の可能性が開けているのではないかと考える。そのことを提示するのが次の課題である。この課題を考えるにあたって、同じような両言語文化を交錯させながらも、それでいて日本とは異質な「神の視点」の言語文化で建国し、「虫の視点」の言語文化と交錯させて社会を構成してきたインドネシアと比較し、両者の相互協力が必要であることも提案したい。

「神の視点」の言語文化とは、英語のように、話者が高い位置に自らを位置付け、そこから自己も、話し相手（対者）も、第三者（他者）をも見下ろして話す言語と、それに分かちがたく結びついた文化を意味し、「虫の視点」の言語文化とは、空中を飛び回る昆虫のように、話者自身が空間を移動しながら話す言語と、それに分かちがたく結びついた文化を意味する。金谷武洋が森田良行の「鳥の視点」と「蛇の視点」に触発されて造った造語であるが、言語と文化を考えるうえで非常に教えられるところが多い

見方である。日本とインドネシアの文明は「虫の視点」の言語文化を基盤として立つ文明だが、日本が明治の開国以来ずっと「神の視点」に立つ「科学技術文化」を取り入れて国家形成してきたのに対して、インドネシアは同じように「神の視点」ではあるが、（「科学技術文化」ではなく）一神教という宗教を取り入れて国家形成をしてきたという違いがある。そこにどのような違った現象が起こるのか、を示そうと思う。

その違いは、概括的にいえば、前者では物質的繁栄を遂げたが、精神的衰退を招き、後者では精神的な豊かさは得られたが、物質的衰退を余儀なくされたという対照である。いずれの文明も人間を幸福にしたとはいえない文明であった。

とはいえ、根底に「虫の視点」の言語文化をもちつつも、表層に「神の視点」の言語文化を並存させる両者は、一方で、独立精神の涵養と諸民族の交流に貢献し、他方で混迷を深める現代文明をその危機から救ううえで重要な役割を果たせるのではないかと考える。

一国の独立、個人の独立を強調した福沢諭吉

開国して間もない明治八年、福沢諭吉は『文明論の概略』（以下『概略』と略記）を著わした。開国して間もない時期だから日本中が旧文化を引きずりつつあるなかで、新たな独立国家体制を形成しなければならないという急務に追われていた。英米仏ロといった列強が虎視眈々と日本支配をねらっていたからまさに火急の課題だった。福沢は『概略』で国家の独立を、そして明治五年から明治九年にかけて著わした『学問のすすめ』では「わが日本国人も今より学問に志し気力を慥かにして、まず一身の独立を諮り、したがって一国の富強を致すことあらば、なんぞ西洋人の力を恐るるに足らん。道理あるものはこれに交わり、道理なきものはこれを打ち払わんのみ。一身独立して一国独立するとはこのことなり」（福沢二〇〇二：二一）と述べ、国民一人ひとりの独立を力説した。一国の独立が国民一人ひとりの独立心に立脚することはいうまでもない。彼は『学問のすすめ』で「国と国とは同等なれども、国中の人民に独立の気力なきときは一国独立の権義を伸ぶること能わず」と述べ、「第一条　独立の気力なき者は国を思うこと深切ならず」、「第二条　内に居て独立の地位を得ざる者は、外に在りて外国人に接するときもまた独立の権義を伸ぶること能わず。」、「第三条　独立の気力なき者は人に依頼して悪事をなすことあり」（福沢二〇〇二：二二―二六）と加えて忠告したのである。

『概略』は全部で一〇章から成り立っているが、その最終章に

は「自国の独立を論ず」というタイトルがつけられており、国家の独立がいかに大事か、熱弁を振っている。その文章は切迫感に満ちており、軽妙洒脱な表現が目立つ他の章とは異質であるだけに、彼がこの章に大きな比重を置いたことがうかがわれる。彼はいう。「(西洋諸国と日本の文明を比較すると) 日本の文明は西洋の文明より後れたるものといわざるを得ず。文明に前後あれば、前なる者は後なる者を制し、後なる者は前なる者に制せらるるの理なり。昔、鎖国の時にありては、我人民は固より西洋諸国なるものをも知らざりしことなれども、今に至ては既にその国あるを知り、またその文明の有様を知り、その有様を我に比較して前後の別あるを知り、我文明の以て彼に及ばざるを知り、文明の後るる者は先だつ者に制せらるるの理をも知るときは、その人民の心に先ず感ずる所のものは、自国の独立如何の一事にあらざるを得ず」(福沢一九九五：二六三) と。

福沢の過誤

文明に前後があり、「前なる者」が「後なる者を制」するのが「理」であるという彼の論は当時の文明観を反映したものであり、そのまま受け入れるわけにはいかない。文化相対主義に立ってみれば文明そのものに優劣や強弱はないと見るべきであり、彼がいうのは政治的な力関係の問題だからである。もし「前なる」文明が優れているのであるならば、「無情残刻」(福沢一九九五：二八七) と福沢が非難するその汚点は許されなかったはずである。見習うべき西洋文明に多くの「無情残刻」があったことは福沢自身が認めている。彼は香港やインドで見た現地人に対するイギリス人の横柄な態度に驚いているし、イギリス人がインドで行った「無情残刻」をも糾弾しているのである。その一つは、植民地政府が役人を採用するにあたって、インド人も受験できるが、イギリス人とは明確な差別扱いをしており、インド人が登用される可能性はほとんどないといい (福沢一九九五：二八七―二八八)、もう一つは殺人事件で、一人のイギリス人がインド人を銃で殺したが、彼を裁く法廷では彼が猿と間違えて発砲したという弁解が通ってしまったという例を出している (福沢一九九五：二八八―二八九)。さらに福沢はアメリカの白人たちの所業をも非難している。彼はいう。「今の亜米利加は、元と誰の国なるや。その国の主人たるインヂャンは、白人のために逐われて、主客処を異にしたるにあらずや。故に今の亜米利加の文明は、白人の文明なり、亜米利加の文明というべからず。この他東洋の国々及び大洋州諸島の有様は如何ん。欧人の触るる処にて、よくその本国の権義と利益とを全うして、真の独立を保つものありや。ペルシャは如何ん、

印度は如何ん、シャムは如何ん、呂宋、爪哇は如何ん」（福沢一九九五：二九〇）と欧米人の「無情残刻」に対して憤りを込めて非難しているのである。そのような悪逆非道の欧米列強の犠牲にならぬよう、何としてでも国家の独立を早急に達成せねばならぬというのが福沢の忠告であった。

完全無欠な文明とはいえないが、独立を達成するためには西洋文明を取り入れる必要があるという彼の提言がその後の日本人の文明観を支配したのは、止むを得ないとはいえ、大きな障害となったことは事実である。西洋文明を見習うべき進んだ文明としたことは、裏返して見れば、自国の文明を蔑むことになるからである。それは残念なことであった。というのは、福沢が『概略』や『学問のすすめ』を著わした頃から数えて一四〇年近くの歳月が経った今、西洋文明の限界はますます明らかになっているからである。そしてそれに代わる文明が模索されているし、その新たな文明の土台に日本を含む東洋の文明が大きく貢献すると期待されているからである。

「神の視点」の言語・英語の利点と欠点

長いことアメリカやオーストラリアに住み、シドニー大学から学位を取得し、後にインドネシアの大学で教鞭をとりつつ人類学的な調査を続けてきた加藤久典氏が語るには、英語は自分の主張が明確な時にははっきりと主張できるという。「今まで、英語で言葉を発するときの方が、うまく表現できることが何度もありました。（英語がうまいというつもりはありませんが、）英語のほうが「言いやすい」と感じたのです。……英語で表現しやすかったのは、多くの場合、自分の確固たる考えを述べるときでした。つまり、相手にしっかり自分の意思を伝えるにはIで始まる英語のほうが話しやすいのです」。彼はインドネシア語もできるので日本語やインドネシア語と比較しながら英語のことを語っていると見てよい。これは、たとえば日本語と英語のバイリングアルの子供について、「日本語を話す時は大人しいのに、英語に切り替えた途端、俄然「人が変わったように」自分の意見をはっきりと述べて自己主張する」という金谷の述べるところと同じである（金谷二〇〇四：一〇五）。

自分の意思を伝えやすいということから攻撃的となることは大いにあり得る。加藤氏の人柄をよく知る筆者から見れば彼が攻撃的になるのは想像できないが、英語を話すときに攻撃的になるというのはしばしば指摘される。たとえばブッシュ前大統領の、正義と邪悪という対立構造を設定し自らを正義の側に置き、フセインを邪悪と呼び、攻撃した例が思い出される。彼は敬虔なプロテ

スタントとして有名だが、彼の場合のように話者が攻撃的になるのは彼の世界観あるいは宗教が強く作用していると考えられる。

英語のほうが「話しやすい」のは、Ｉで始まるからだと加藤氏はいう。英語は主語を立てない限り発話できない。したがって話者自身が自らの考えを述べようとするときにはＩを立てなければ発話できない。これは当たり前のように思われるが、日本語やインドネシア語あるいはジャワ語と比較したとき、それが当たり前ではないということに気づく。これらの言語ではＩにあたる自称詞[1]がなくても発話できるからである。欧語でもスペイン語では一人称代名詞を明示しなくても発話できるから、一見したところ、日本語などと似ているように見えるが、スペイン語は人称にしたがって動詞を活用変化させ、人称を示すことができるから必ずしも日本語などとは同じではない。とくに一人称単数のyoは/dʒo/とも発音され、そのように発音されたときには語感が強まるので自己主張が可能になる。

加藤氏はまた興味深いことを述べている。彼はいう。「オーストラリアやアメリカの友人を一人一人思い出すに、彼らの考え方に、相手と自分という区別をはっきり感じ取ることができるということです。それが英語だということです」と。相手はあくまでも相手であり、自分もまたあくまでも自分であり、自他の間に明確な境界があるということのようだ。主語を立てなければ文章が成り立たない言語の結果だろう。

自立を促す対立的環境と「神の視点」

厳しい環境のもとでは自助精神がなければ生きていけない。他者は助けてくれないからである。逆に、他者が助けてくれるような社会、したがって相互扶助が発達した社会では自助精神ではなく相互扶助精神が強まるだろう。「神の視点」は前者で、「虫の視点」は後者で発達したと考えられる。なぜ「神の視点」の言語が生まれたのだろうか。いくつかの要因が考えられるが、英語に主語が発達したのが一二世紀だったという金谷の指摘は注目に値する。参考になるだろう。

イギリスは一〇六六年にノルマン人に征服され、それから三〇〇年にわたって支配された。金谷は、フランス人とその言語であるフランス語の支配下で、英語に主語が現れ、定着したという（金谷二〇〇四：一四七―一五四）。その詳しい経緯を金谷は論じていないが、支配されるという厳しい環境のなかでイギリス人は自らの言語で精いっぱいの抵抗を試みたのではないかと思われる。

欧語は一般に主語を立てる言語だが、とくに英語にそれが顕著である。スペイン語については既に指摘した通りで、主語を明示

しなくても文章は成立する。しかし述語動詞の活用で暗に主語を示していることで明らかなように主語は必須である。他の欧語についてもほぼ同様のことが言えるが、英語はやや特異である。英語は述語動詞の活用が乏しく、be動詞を除くと三人称単数を主語にしたときに変化するだけで、他の場合には変化しないから述語動詞からだけでは主語が判らない。英語は主語に大きく依存する言語である。

金谷は、英語は「神の視点」の言語の最たるものであるという（金谷二〇〇四：一七六）。「神の視点」とは、すでに述べたように、話者が高い位置から発する言葉である。ここで「神」といっているのは、いうまでもなく、唯一至高の神であり、「やおよろず」の神ではない。話者は一旦、自らを高い位置に置き、そこから自己なり、自己を取り巻く環境を見下ろす。そうすることで客観視が可能という特性をもつ。その客観視は、至高の神の如く、権威をもつ。絶対性をもつ。客観視はまた演繹的見方や分析的見方をも伴う。たった一つしかない一人称代名詞なのだからIは権威をもつ。これは誰でも使える代名詞だから汎用性、一般性があり、抽象的である。「虫の視点」のたくさんある自称詞にはそうした意味での権威も汎用性も一般性も抽象性もなく、大きく異なる。

Iは発話者自身であることを示す記号にすぎない。したがって情報量も限られている。だからそれを説明する述語も必要になる。高い位置から見れば話し相手（対者）も見える。それをyouという一つの代名詞で表現する。だが、それも対者であることを示す記号に過ぎない。情報量は少ない。対者であることを示す以外の働きをしないからyouの内容を述語で説明しなければならない。たとえば日本語の「わたくし」のように、それだけでも、ある程度は何者であるのかが判る「虫の視点」の自称詞とは違う。「虫の視点」の言語でも自称詞を説明する述語が必要の場合もあるが、「神の視点」の場合とは異質である。その違いは他動詞の多用と自動詞の多用の違いに見ることができる。「神の視点」では主語の状態だけでなく、行動を示すことが多いから、他動詞を多く使うことになり、他方、「虫の視点」の言語では状況の説明が多く、自動詞が多くなる。

「神の視点」と一神教

インドネシアのイスラム教徒を研究している加藤氏はまた、興味深いことを指摘している。彼はいう。「私は宗教について研究をしていますから、やはり西洋のキリスト教、そしてイスラム教もそうですが、神と自分の関係、という視点を持っているので「強い」と感じることがあります」と。「強い」という点について

はすでにブッシュの例を挙げた通りである。金谷が「神の視点」といったとき、彼はとくにキリスト教との関係に言及していないが、「神の視点」の神がキリスト教のような一神教の神を指していることは明らかである。一神教における神と人間（信徒）の関係は、創造者と被造者の関係であり、保護者と庇護される者の関係であり、見る者と見られる者の関係である。造られ、保護され、見られる存在である人間（信徒）は、造り保護し見る存在である神に忠実である限り、恐れるものはない。神の意に沿っていると信じる限り、彼は堂々とものが言える。確固たる信念に基づく言葉として主張できるだろう。はっきりとものがいえる。他方、「虫の視点」ではそうした信念は生まれにくいだろう。ただ、変わりゆく状況にまかせ、臨機応変の状況主義となる。これは「責任」の問題とも関係する。

日本ではしばしば「現地の人々に溶け込んでいる人」を賛美する。まさに自己を滅却し、他者のなかに没入することをよしとする見方である。自他をはっきり区別するという考え方の対極に位置しよう。それは「横のつながりを大切にする共同体の維持を大切にする」（加藤氏）という考え方につながる。そこでは協調性が大事にされ、自己主張は避けられる。

「虫の視点」の言語文化：話者の自己はない

「神の視点」の話者と違って「虫の視点」の話者は虫のように動きまわる。話者は自身の目を離れることはない（できない）。動き回る虫が自らを見ることができないように、「虫の視点」の話者は自らを見ることができないのである。環境のなかを動き回る存在だから環境そのものでもある。そこには自己と環境を峻別する境界がない。環境に埋め込まれて一体化する。「虫の視点」の言語、たとえば日本語では、どこか見知らぬところで道に迷ったとき「ここはどこ?」と訊くだろう。話者自身は「ここ」にいるのだが、自身を見ることができないから自身がいる場所（ここ）しか見ることができないのである。自己が見えないから、決して where am I? というように自己を客観的に表現することはない（金谷二〇〇四：五九）。他方、英語の話者は道に迷っている自分が見えるからIと言える。

動き回る話者、自分が見えない話者に権威を認めることはできないだろう。逆に、権威は他者の側にある。自己に対して立つ対者であり、環境に権威があることになる。自己はそういう他者に対して対立する者ではなく、むしろ他者を立て、それに一体化し共同性を得ようとする。

「虫の視点」の場合、「神の視点」の言語とは違い、高い位置か

ら自他をともに等置的に見ることができない。したがって態度としては自己中心的であり、思考の対象としては他者中心的となる。「虫の視点」の場合、話者は対者が現れてはじめて発話ができるのであって対者がいなければ発話できない。発話が実現したときにはじめて話者と対者の関係が構築される。その関係は個別的であり、具体的である。だから話者がどういう自称詞を使い、どういう対称詞[2]を使うかですでにある程度のメッセージを送ることができる。

社会性・協調性・他者を大事にする言語と文化

独立性・自由を大事にし、それが高じて攻撃的になる英語の世界に比べると対極にあるのが社会性・協調性・他者を大事にする日本語とインドネシア語あるいはジャワ語の世界である。日本に長く住んだあるアメリカ人が日本に滞在している間に最も強い印象を受けたのが、レストランなどで出される冷たいおしぼりのサービスだったという。日本では見慣れたサービスだから感動することはないだろうが、客に対するこの気遣いはアメリカ人には特別なものと受け止められたようだ。おそらく店に入ってきた客に対する「いらっしゃいませ」や店を出る客に「ありがとうございました」と深々と礼を言うのも印象深かったのではないかと思われる。ひと頃よく言われた「お客様は神様」を思い出す。客という他者を神の如く大事にするのである。この場合の神は一神教の神ではもちろんない。物質的利益をもたらす恵み深い「ご利益」の神である。

社会性・協調性・他者志向性が独立精神を育てないことも指摘しておかなければならない。福沢が国民一人ひとりの独立を最重要課題と強調したにもかかわらず、今日の日本人を考えると、彼の期待は必ずしも応えられてはいないことは明白である。例えばテレビである商品が宣伝されると前夜から徹夜で店先に並んだり、長蛇の列を作るなどといった、自主的判断に基づく行動とは思えない現象が見られる。宣伝に引きずられた行動だし、同じように行動する他人と歩調を合わせる行動としか考えられない。もっとも、こうした行動は大衆社会的現象でもあるから日本に限らない現象と言えなくもないが、日本では社会的同調の意識も強く働いていると考えられる。小中学校では他の生徒と同じように行動しないといじめられる。服装も他の生徒と同じようにしないと仲間から排除されるという。同調主義である。学校でも講演会などでも一般に日本人は質問も意見も言わない。目立つからであり、目立つということは同調の反対だからである。「横並び」もそうだろう。ある人がある一流企業に公共事業のための募金を求

めたところ「募金には応じるが私どもの社名は出さないでほしい。同業者からとやかく言われたくないので」といったという。募金を要請した人は意外に思ったと筆者に語った。彼は、企業名を公表すれば企業のイメージアップにつながると思ったからである。その企業は世界に名を知られた一流企業である。日本を代表するその世界的企業ですら日本文化の中にあっては目立つのを恐れるのである。驚いても無理はない。

最近に限ったことではないが、企業の不始末はしばしば摘発され、報道される。興味深いのは当該企業の責任者の「このたびの件に関しては皆さまに大変ご迷惑をお掛けしたことを深くお詫び申し上げます」という謝辞の言葉である。法に触れた不始末そのものを詫びるのではなく、社会に掛けた迷惑を詫びているのである。事実よりも社会への配慮が優先している言葉といってよい。

なぜなのだろうか。原因はいくつも考えられるが、その一つとして、日本語という言語の構造そのものに原因があると考えている。他者依存性あるいは他立性である。他者が大きい存在なのである。他律性が強いために、しばしば指摘される無責任も生まれるし、権威主義も生まれるのだが、これらについてはまた稿を改めて論じることにして、ここでは言語構造との関連だけを指摘しておきたい。

他者依存性が最も強く現れるのが敬語を使う場面である。敬語抜きの日本語はありえないから日本語を話す限り、この他者依存性から逃れられないということになる。日本語以外に使う言葉がない日本人の宿命といってよい。

日本語を使おうとすると、相手が誰であるかを見て、頭のコンピューターが計算し、「社長さん」、「先生」、「お客様」、「お宅様」、「おじさん」、「あなた」、「君」、「お前」、それに個人名などたくさんある中から適切と考える対称詞を選ばなければならない。誰に対しても使える英語の you、若干の区別はあるもののフランス語の vous や tu、あるいはスペイン語の usted あるいは tu とは違う。非常に具体的で個別的なのだ。もちろん、適切な対称詞が見つからないこともあるからそのときには使わないという方法もある。そして「おっしゃる」などの動詞や名詞や形容詞に「お」とか「御」を付けて失礼を冒す危機を回避しようとする。敬語にがんじがらめになっている日本語では敬語を使い間違えれば人間関係を壊してしまう。だからどうしても細心の注意を払わなければならい。

この言語は対者への気遣いを忘れないから相手の反応がいつも気になる。同意しているかどうか、それを確かめるような表現をしたり、表情を作る。言い放つような表現つまり断言を避け、続

けるような表現をとるのも一つの特徴である。「…です」で終わらずに「…ですが…」のように「が」をつけて、断言を避け、あたかも継続しているかのような表現をとる。「…とは思います」というときの「は」も不思議である。「は」をつけて含みをもたせるのだ。この言葉を聞いた人は「…とは思いますが…」というように、「とは思います」の後に「が」が来ることを予想する。そしてその「が」の後に、前の「…」で述べられたメッセージを否定するような言葉が出てくることを予想する。しかしそれは出てこないのである。したがって断言を避けようという気持ちの現れと考えてよい。

このような言い方は、たとえば「今日は」といった挨拶語でも見られる。「今日は」は本来、その後に続くはずの、たとえば「良いお天気ですね」のような（実質的な）言葉の前置きであったはずである。「今晩は」にしてもそうだし、「さようなら」も同様である。「さようなら」は「左様ならば」つまり「そのようならば」の意味である。今日では「それじゃあ」とか「じゃあね」、「では」という挨拶語もあるが、発想は同じである。「さようなら」の後は、「気をつけて行ってらっしゃい」といった言葉が続かないと意味が不明である。しかし後の言葉は表明されないで、対者に好意的に補足してもらう、いわば対者依存の挨拶語ということになる。もっとも、今日では「さようなら」の後を補わなければならないという意識はもうないだろう。

対者に好意的に補足してもらうことと関連してしばしば使われる「よろしくお願いします」や「よろしくお伝えください」などの「よろしく」にも触れなければならない。これも対者の好意に委ねる対者依存の言葉と解釈できる。そのときの対者は願いを聞き入れ、実行してくれるような信頼できる人である。そのとき対者は大きな存在であることが期待されている。

対称詞だけではない。「私」、「私ども」、「僕」、「俺」、「うち」、「先生」、「お父さん」、自分の名前、などたくさんある自称詞も適切なものを選ばなければならない。自称詞で面白いのは、若い人たちの間でしばしば使われている「自分」である。映画などを見ると昔も兵隊たちが使っていたようだが、現在では若者が使うのである。筆者は男子学生が使うのを耳にした。多分、「私」も不適切、「僕」も不適切、「俺」も不適切と悩んだ挙句に、切羽詰まって見出した自称詞なのだろう。

適切と考える自称詞を探すのに苦労するだけではない。厄介なのは、相手の動きや自分の動きを表わす言葉についても変えなければならないことである。「食べる」がいいのか、「食う」でいいのか、「いただく」にすべきか、悩みは尽きないのである。

相手が誰であれ、同じ一人称代名詞と二人称代名詞で済ませることができる英語にそうした煩雑さはない。ただしドイツ語やフランス語やスペイン語には二種類の二人称代名詞があるし、動詞も変化するから英語より気を使うが、日本語ほどではない。

インドネシア語とジャワ語の言語文化

日本語、インドネシア語、ジャワ語は似ている。それは、ともに「まず他者ありき」の言語だというところに見ることができる。英語のように「まず自己ありき」なのではない。「まず自己ありき」であれば、自分が中心であり、自分を中心に考える文化を伴う。そして他者は端役に回される。他者との関わりは独善的になる。このような言語は自立心を育てるし、すでに述べたように、「独立」という観念と結びつく。英語のIは誰が相手だろうとその相手との関係に左右されない、微動だにしない一人称代名詞である。

しかし「まず他者ありき」の言語では、他者が現れない限り、自己は存在しないも同然である。むしろ他者が中心であり、自己は端役に回る。他者を中心にした「かかわり」の言語となる。他者依存的になるからこの言語では自立心が育つのは難しい。むしろ反対に他者を立てる。他者が立たされる。そして立たされた他者に自己は律せられる。この言語文化では他律性が強く働く。それは関係性を強める文化だといってもよい。自ずから「独立」という観念からは遠くなる。「自己主張」は忌避される。しかし「社会」や「協調」という観念にはなじむ。

インドネシア語はインドネシア共和国の国語である。インドネシアは三五〇を数える多数の民族が構成した多民族国家で、それぞれの民族は独自の言語をもっているから同じ国民でも民族が違えば意思疎通ができない。そのために独立したときに国語を制定した。インドネシア語は東南アジア島嶼部で共通語（リングア・フランカ）として使われていたマレー語を母体としている。時制も、単複の区別も、ジェンダーもなく、語順の規則も一応、主語と動詞を先頭に置くといった英語のような語順の規則もあるが、それほど厳密ではない自由な言語で、使いやすい。発音も母音を多く使うので聞き易い。日常用語としてはしごく便利といえる。しかし精確にものごとを伝えたいときにはさまざまな障害が生じる。その一つに語彙の問題がある。少ないのである。そこでジャワ語からの借用や（かつては）オランダ語、現在は英語といった外来語から取り入れて語彙を増やさなければならない。最近では英語からの借用が増えている。インドネシア語はローマ字で表記しているので英語をそのまま借用できるという利点がある。漢

字、カタカナ、ひらがなで表記する日本語と大きな違いがある。インドネシアの人口は現在二億四千万人といわれているから、人口だけで見れば大きな言語といえよう。さらに隣国のブルネイの言語と同じであり、マレーシアの国語であるマレーシア語とかなり共通し、相互に意思疎通できるし、シンガポールの公用語のひとつでもある。東南アジアの国際語である。

ジャワ語を使うジャワ人は、インドネシアの最大の民族であり、その数はインドネシア総人口のおよそ四〇%になると推定されるから（Biro Pusat Statistik）、一億人の人々が使っていることになる。もちろんジャワ人以外の他民族と話すときにはジャワ語は通じない。必然的にインドネシア語に切り替えざるを得ないから彼らの多くはバイリングアルとなる。ジャワ語とインドネシア語はともにマラヨ―ポリネシア（オーストロネシア語）語族に属してはいるが、文法の違いや単語の違い、音の違いなど多くの違いがあり、別の言語である。とりわけ大きな違いは敬語の有無である。一般に近隣の人々や家族内では母語であるジャワ語を使い、他民族との間、あるいは公式の場面などではインドネシア語を使うが、以下で述べるようにジャワ語は敬語が複雑なので、若者はジャワ語よりインドネシア語を使う傾向が強まっている。もちろん小学校から大学まで授業ではインドネシア語を使っている。ただ、最近、小学校や中学校ではジャワ語の授業が復活しているが、それは民族意識を高めるため、また、インドネシア語では文化を教えることが難しいという問題があるからである。インドネシア語は国語であり、共通語として民族語よりも高い地位にはあるが、文化的背景が乏しいという難点がある（マルバングン・ハルジョウィロゴ：一一）。

インドネシア語とジャワ語の自称詞と対称詞

インドネシア語も日本語と同じで、相手が決まらないと自分を指すのにakuがいいのか、sayaがいいのか、gua（gue）でいいのか、使い分けねばならない。akuは日本語でいえば「俺」や「僕」といった感じの自称詞で、sayaは「わたし」ぐらいにあたる。面白いことは、sayaは「しもべ」を意味するsahayaを語源としていることだ。「僕」に似ているのである。したがって自己を低める意味合いがあった。現在ではそのことを知っているインドネシア人は少ないようだが、確かに、akuよりも自己を低める意味合いはある。他方、akuは友達同士の間で使われる。[3] なお、gua（gue）はジャカルタの先住民であるブタウィ人の言葉だと言われているが、中国語が語源らしい。もしそうだとすれば、非常に興味深い。というのは、かつてスハルト時代に

は中国語も中国文化も中国人の存在も否定されていたからである。一九九八年にスハルト体制が崩壊した後の故アブドゥルラフマン・ワヒッドが大統領のときに中国語も中国文化も中国人もその存在を認められるようになり、それに伴い gua（gue）やそれとペアになる対称詞 lu が広く使われるようになったと思われる。いずれにせよ、この自称詞と対称詞はジャカルタの若者が使っていたのだが、テレビの影響で広く全インドネシアの若者の間で使われるようになった。

相手を指す対称詞も kamu がいいのか、anda（これは三、四〇年前まではラジオやテレビのコマーシャルでしか使っていなかった）にすべきか、engkau や lu でいいのか、迷う。ただ注意すべきは、kamu にせよ、engkau にせよ、lu にせよ、目上の対者には使えないことである。おそらく（アラビア語起源の）anda が使われるようになったのも目上の対者に対する対称詞がなく、この後で述べる親族呼称が使われていたのを補うためであろう。他に tuan という対称詞もあるが、これは主に外国人に対して使われるのであってインドネシア人同士では使われない特殊な対称詞である。いうまでもなく植民地主義の匂いが漂う。「そこ」を意味する situ が対称詞として使われていることは実に興味深い。方向を示す代名詞である「こちら」、「そちら」、「そなた」、「あなた」が自称詞や対称詞さらに（第三者を指す）他称詞（あちら）にも使われる日本語と共通するからである。これが何を意味するのかについては、すでに論じたのでここでは割愛する（染谷一九九三：七〇―を参照）。

親族呼称も頻繁に用いられる。とくに目上の対者に向かってはこれしかなかった。anda も situ も必ずしもまだ一般的ではないから親族呼称の役割は依然として大きい。この後に紹介する bapak か mas か saudara などである。個人名も、日本語と同じように、自称詞や対称詞として使えるから、[4] 自称詞や対称詞は無数にあるということになる。欧米語とは決定的に異なる。

ジャワ語はインドネシア語より日本語に似てもっと細やかで、それがジャワ人自身を悩ませている。自称詞は aku（アク）、kula（クロ）、dalem（ダルム）、それに小中学校の先生が生徒を相手にしたときには pak guru（男の先生の場合）とか bu guru（女の先生の場合）というように「先生」の意味の guru（グル）も使える。日本語と同じだ。また、年下の者は個人名も使える。これも日本語と同じである。

対称詞は panjenengan（パンジュヌガン）、sampeyan（サンペヤン）、kowe（コウェ）がある。panjenengan や sampeyan は敢えて日本語でいえば「あなた」にあたるが、微妙な違いがあ

り、同じとはいえない。ただし紙幅の関係で、ここではその違いを説明することは避けておく。kowe は「おまえ」にあたろうか。こうした対称詞は誰もが誰に対しても使える一般性をもっているが、もちろん英語の you ほどの一般性はない。日本語の「あなた」や「おまえ」を考えれば、それは容易に理解できよう。panjenengan などの対称詞が一部変形したり、省略されたりして微妙に意味合いを変えて使われているのは対者への配慮を表しているが、そのことについてはかつて論じたので（染谷一九九三：三―九三）、ここでは触れないでおこう。

これらの対称詞に加えて重要なのは親族呼称である。bapak（バパッ、父）、pak（パッ、父）、ibu（イブ、母）、bu（ブ、母）、pakde（パッデ、伯父）、paklik（パレッ、叔父）、mas（マス、兄）、kang（カン、兄）、mbak（バッ、姉）、dik（デッ、弟、妹）、nak（ナッ、子）などが実に多く使われ、自己と対者の間の関係性を微妙に表現している。その詳細についてもかつて論じた通りである（染谷一九九三：一一―五六）。親族呼称の他に個人名も使えるから対称詞は無数にあるということになる。

発達したジャワ語の敬語

ジャワ語には日本語と同じような敬語がある。話す相手への尊敬の度合いによって相手の行為や身体や持ち物にも丁寧語（クロモ（krama、kromo））や尊敬語（クロモ・インギル（krama inggil））があり、自分の行為や身体や持ち物には謙譲語（クロモ・アンダップ（krama andhap）という）を使わなければならない。例えば尊敬すべき人の「食べる」は日本語の「召し上がる」にあたる dhahar（ダハール）と言わなければならない。敬意の度合いが少なくていい場合は nedha（ヌド）、「食う」にあたるような敬意を込めないときには mangan（マンガン）となる。「食べる」、「飲む」、「来る」、「命ずる」、「言う」、「与える」など日常的によく使う動詞は、このように敬意のあるなしに従って、階段を昇り降りするように、使い分けなければならない。顔や目や手や足あるいは家など人の持ち物も変えなくてはならない。「顔」は、普通語（ゴコ（ngoko）という）は rai（ライ）だが、尊敬語は pasuryan（パスリャン）となる。ちなみに surya は太陽の意味である。「目」は、普通語は mata（モト）ないし mripat（ムリパット）だが、尊敬語は paningal（パニンガル）あるいは soca（ソチョ）となる。「家」は、普通語では omah（オマー）だが、丁寧語では griya（グリヨ）、尊敬語では dalem（ダルム）となる。

敬語に覆われたジャワ語では客観表現がほとんど不可能ではな

いかと筆者は考えている。その点で日本語とは異なる。日本語は明治以来、英語などの西洋語に接して「神の視点」的な表現ができるようにされてきた。たとえば「である」という表現である。この表現が中世から使われていたとしても一般化したのは、たとえば「吾輩は猫である」のように、明治以後ではないかと思われる。これは英語のｂｅ動詞の訳語としては適切であったのではないだろうか。尊敬語でも丁寧語でもましてや謙譲語でもない敬語体系から自由な言葉だから、通常の会話には使われず、文語とりわけ客観的な表現が必要な論文で使われる。後述するように、「観察する」といった漢語の「観察」に「する」を付けた表現も「神の視点」的な表現であろう。ジャワ語にはそうした言葉はない。しかしインドネシア語にはあるので、ジャワ語を使うジャワ人にとっては救いになる。

中部ジャワとりわけジョグジャやソロでは言葉づかいに厳しいから、とくに十分な言語教育を受けていない現在の若者はジャワ語を使いたがらない。そしてインドネシア語に逃げる。もちろん上に挙げたように、インドネシア語にも複数の自称詞や対称詞があるから、英語のように誰が相手であれ、自分を指す言葉が一つしかないというのとは違うが、ジャワ語のように行為や身体や持ち物について尊敬語や丁寧語そして謙譲語というものはないからまだ使いやすい。彼らにとって敬語があまりないインドネシア語はオアシスのようなものだ。インドネシア語は国語だから制服のようなもので、誰に対して使っても失礼にはならない。礼服のような役割を果たしているわけである。

それに比べると、日本語以外に話す言葉がない日本人は悲劇である。オアシスがないのだから。インドネシア語という比較的フランクな言語をもつインドネシア人がうらやましくなるのは筆者一人ではあるまい。オアシス言語がない日本人は敬語に縛られっぱなしである。相手への気遣いから最近の日本語は敬語が過剰気味になるのも無理はない。たとえば、「…させていただきます」が連発されると、辟易する人も多いのではなかろうか。どうして「…します」と単純明快にいえないのだろうか。混乱気味という印象もある。先日の国会では尊敬語のつもりだったのだろうが、「申された」という謙譲語を相手に使った大臣がいた。「申す」はあくまでも謙譲語だから相手の行為には使えないはずである。ただ、丁寧語としても使うこともあるのでその大臣はその意味で使ったのかもしれない。しかし一般には謙譲語である。客に向かって「申し出てください」という言い方も問題である。しかしこれはもう普通になっているようだから今更異議を唱えても始まらないのかもしれない。言葉は変わるのだ。

見えるものを主とする考え方

「かかわり」を大事にするのは「山が見える」といった表現にも見られる。

「山が見える」という表現は、日本人にとっては自然な表現だろう。しかしこの文をそのまま英語で表現しようとすると難しいことに気づく。The mountain is seen とか The mountain can be seen と受動表現で言えないこともないが自然な表現とはいえない。I see the mountain のほうが自然だろう。しかし、逆に「私は山を見る」という日本語は、間違いとはいえないまでも、使われることはないだろう。自然ではないのである。面白いことに、スペイン語にも se ve la montãa[5]というように「山が見える」に似たいい方があるが、それでも基本は英語と同じで「私は山を見る」veo la montãa という形である。

この「山が見える」という表現について金谷の「虫の視点」からの解釈は興味深い。「虫の視点」では話者自身は自らを見ることができないから「誰が」というのは表現できない。表現されるのは「見る」という行為とその対象だけということになるという（金谷二〇〇四：五八）。

一般に私たちは日本語にも主語があると思っているが、それは明治時代の国語学者大槻文彦が欧語に主語があるのだから日本語にもなければならないという思いから英語の文法を日本語にあてはめたからで、日本語に主語はないと主張した三上章の考え方は無視されたという（金谷二〇〇二：一四―二〇）。欧米を基準ないし模範にする考え方は至るところに見られたが、日本語に対する見方も例外ではなかった。今もなお、欧語の文法で日本語を研究している言語学者はたくさんいるし、学校でもそのように教えられている。

「虫の視点」という考え方で対称詞と自称詞を考えると、まずそのどちらも対者が誰であるかによって決まるということ、つまり対者の存在が大きく、それに依存する度合いが大きいということを挙げなければならない。話者がまず注意を払うのは自己ではなく、対者であり、対者をどういう対称詞で規定するかがまず大きな課題となる。とくに配慮を要する対者には格別な対称詞が必要だから、たとえば「先生」のような敬意がこめられた対称詞が単に教員だけでなく、医師や議員などにも拡大的に使用されることになる。そうすると、使い古された対称詞はだんだん価値を下げ、転落する。日本語の対称詞に転落傾向があることは既に辻村や森野らによって指摘されてきた（辻村：三九三―三九五、森野：一七七―一七八、染谷一九九三：七一）。

それに対して自称詞はどうか。自称詞をなるべく使わないの

は、自己が見えないからという理由に見ることができるが、それに加えて、自己を見えなくするかのような「わたくし」あるいは「わたし」という謙譲つまり自己を低く位置づける意味合いの自称詞も挙げなければならない。他方、親しい対者に対して用いられる「僕」や「俺」にはそうした意味合いはない。自己を表現しても支障はないのである。

「山が見える」と同じような表現はインドネシア語でも可能であるし、ごく自然な表現である。gunung terlihat とか gunung kelihatan という表現である。gunung は「山」で terlihat や kelihatan は「見える」と訳せる。ter や ke…an という接頭辞や接尾辞は受け身的な意味合いを出す。こうした表現はジャワ語にもある。gunung katon とか gunung katingal という。katon は普通語で、katingal は丁寧語であるが、インドネシア語と同じように受け身的な意味合いがある。だから前者は「山が見える」で、後者は「山が見えます」と訳したらよいだろう。インドネシア語にはこうした区別はないから、gunung terlihat あるいは gunung kelihatan は前後関係から「山が見える」と訳してもいいし「山が見えます」と訳してもよい。いずれにせよ、この三つの言語に似たような表現があるということは、これらの言葉の裏に共通した考え方（文化）があると見てよい。

それは、見えるものを「主」とし、見ている人間を「従」とする考え方である。山を中心に置き、見ている人間を端に置く考え方である。こういう言語は、欧語のように、「見る」という能動性を強調しない。ぬっと姿を現した山が人間の目に飛び込んできてその網膜に映っているという受け身的な言い方のほうが素直である。山はまるで生き物のようにその姿を現し、人間に迫って来る。働きかけてくる。人間は働き掛けられる存在なのだ。「波の音が聞こえる」という言い方もそうだ。まるで波は生き物のように音を立てて迫って来る。波の音が押し寄せてくる。東日本大震災のときの巨大津波の映像は世界中に流れ、圧倒的な印象を与えたが、大きな波が押し寄せ、車や家をごっそりと運んで行く姿はまるで怪獣のように見えたのではあるまいか。山であれ波であれ、それは時に恐ろしく、ときに優しい、生き物そのものである。自然は、本当は、「生き物」だった。事実、私たちの祖先はそのように身の回りの自然を見ていた。私たちが自然を単なるモノとしてしか見なくなってしまったのは、西洋由来の近代科学の目で見ることに慣れてしまったからである。そういう見方が客観視、演繹的見方、分析的見方をとる「神の視点」と深くかかわっていることはいうまでもない。近代科学は自然を生物と無生物に分け、山や海を無生物に分類してしまった。それどころか、つい

に生物も無生物つまりモノと見るようになってしまった。そこに環境破壊という大問題が生じて当然だろう。今一度、自然を「生き物」として見る見方を復活させる必要がありそうだ。そこで日本をはじめとしたアジアの「虫の視点」的な思想の役割が期待される。

このように、身の回りのものが働き掛けてくるという感覚は、「暑いね」といった表現にもうかがえる。これは英語のit's hotのような客観的表現ではなく、暑さが人間を取り巻き、それを人間が「感じている」、あるいは「受け止めている」という主観的表現と解釈した方がよい。「この花、きれいだね」も同じだろう。これも客観的表現ではなく、きれいだと「感じている」主観的表現なのである。

三つの言語に見られる「雨に降られる」

これらの三つの言語に共通してみられる面白いことはまだある。「雨に降られる」という日本語は不思議な言い方というわけではない。だが、It rains（雨が降る）はどう工夫しても「雨に降られる」という形にはならない。目的語がないのだから受動形にはできないのも当然だろう。だから「雨に降られる」に近い表現はget rainedといった表現にならざるを得ない。

インドネシア語ではkehujananという表現があり、これまた普通の言い方である。hujanは「雨」の意味でもあり、また「雨が降る」という動詞でもある。それを語根にしてその前後にke-anをつけると「受身」の意味になる。しかも（雨に降られて）「困った」「往生した」といった被害のニュアンスももっており、日本語と同じである。ジャワ語にも同じようなkodananという表現がある。ジャワ語で「雨」や「雨が降る」をudan（ウダン）というが、それにkaとanをつけたものである。インドネシア語と同じである。

被害の意味合いを込めた「入られる」という言い方もしばしば使われる。「泥棒に入られる」や、いたずらざかりの子供に部屋に「入って来られる」という表現は日本語でもインドネシア語でも同じだ。「（サッカーで）ゴールが入れられた（失点した）」kemasokan golという表現は面白い。masokは「入る」で、golは英語のgoalのインドネシア語表記である。

面白いことは、インドネシア語の「雨に降られる」が、被害の意味合いだけでなく、反対に「恵み」を受ける意味合いでも使われることだ。「昨日の雨で今朝のスマラン市は涼しい」というときにもkehujananが使えるのである。「入って来られる」というkedatanganも、必ずしも「被害」の感覚だけではなく、反

対に恵みをもたらすかのような歓迎の意味で使われることもある。「今度、本校に来られた○○君です」といった歓迎の意味合いで kedatangan が使われるのである。これなどは尊敬の意味合いすらあり、尊敬の意味合いをもつ日本語の「れる」「られる」につながるように思う。

「国境の長いトンネルを……」はインドネシア語でも

さらに面白いことは、あの有名な川端康成の『雪国』の冒頭の文章もほとんどそのままインドネシア語で表現できることである。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という文章は、“Begitu keluar dari terowongan panjang di perbatasan, maka tibalah di daerah/negeri salju” あるいは “Setelah melewati terowongan panjang di perbatasan, tibalah di negeri salju”（Bambang Wibawarta 氏訳）と訳せるという。どちらのインドネシア語文にしても、日本文と同じで、主語がない。「国境の……」は日本語としては全く普通だから気づかないかもしれないが、これを英語に訳そうとした途端に主語がないことに気づく。主語がなくても完ぺきな文章を作れるのが日本語であり、インドネシア語なのだ。

「抜けると雪国」というところがポイントである。通り抜けてどこそこに至るという流れである。この文章だけでは判らない主人公が（長いトンネルを）通過し、それを抜けるという継続的な動きを感じ、雪国を見て何かを感じている。流動感と開けた世界を見たときの解放感が表現されている。それは、サイデンステッカーの英訳のように「長いトンネル」から「出てきた」という表現では表せないのだ。サイデンステッカーの訳は the train came out of the long tunnel into the snow country である。彼は汽車を主語に書き換えてしまった。英語には主語がなければ文章が成立しないからである。

ヨーロッパ語を中心に考えれば、主語を必ずしも必要としない日本語やインドネシア語やジャワ語は奇妙な言語に見えるだろう。だが、逆に日本語やインドネシア語やジャワ語から見れば、主語にこだわるヨーロッパの言語が奇妙に見えてくる。そもそもなぜ主語が必要なのか、という疑問がわく。仮に主語がなくても、聞き手や読み手が意味を理解できるならば不必要ではないのか。やや極端な言い方をすれば、強調したい言葉を並べるだけでも聞き手や読み手が理解できるならばそれで十分なのではないか、という疑問である。文には主語がなければならないという考え方はヨーロッパ語を中心にした考え方で、それが「正当な言語のあり方だ」などというのは根拠がない。こういう「ヨーロッパ

語中心主義」は問題である。残念なことに、日本は、明治の文明開化以来、ずっとそういう考え方に縛られたままできてしまった。それは骨の髄にまで達しており、今も抜けないでいる。残念なことに、インドネシアもそうなのである。インドネシア語の文法もヨーロッパの文法用語で説明されているのが現状である。

「国境の……」の文でいうならば、「国境」「長い」「トンネル」「抜ける」「雪国」を並べるだけでも意味はかなり通じる。これらの名詞や動詞を適切な助詞でつなげれば、それで十分に意味が通じる。そこでは、「誰が」、あるいは「何が」という主語はなくてもよい。むしろ、ない方が聞き手や読み手の想像力に働きかけるために、聞き手や読み手を巻き込むことができるという利点がある。聞き手や読み手は、「国境」「長い」…といった単語から、汽車に乗った人物が長いトンネルを抜けて真っ白な雪におおわれた山あいの景色を見ている、と想像できるのである。それができれば、「誰」も「何」も要らない。もし入れたとしたら客観的な表現になってしまい、事実描写としてはしっかりした文章になるだろうが、逆に、却って現実っぽくなり、情趣が失われてしまう。サイデンステッカーの訳文はまさにそれだった。

「国境の……」の文には主語がないからどういう英文に仕上げたらよいか彼はずいぶん悩んだと思う。ようやく汽車を主語にして the train…と訳した。直訳すれば、「汽車は長いトンネルを抜けて雪国に入った」である。この文は事実をそのまま表現したものであり、非の打ちどころがない。しかし情趣のひとかけらもないのである。共感や反発の感情も引き起こさない。感情とは無縁なのだ。問題はこの文章が汽車を主語に設定したところにあった。汽車を主語にしてしまうと、長いトンネルを走り続ける汽車の薄暗い車内で感じる重苦しさや不安も、そこを抜け出た瞬間、真っ白な雪景色を見て感じるこの世離れした解放感も、清浄感も、表現しようがない。

この小説が発表されたのは一九三五年（昭和一〇年）だった。このトンネル（小説では書かれていないが上越線の清水トンネルである）の開通は一九三一年だった。このトンネルの開通で首都圏と上越地方は一挙に短時間で結ばれることになった。真っ白な雪景色は都会の喧騒から遠く、都会につきものの喧騒や煩わしさから逃れることのできる場所であり、美しい自然に望みを見出すことのできる場所であっただろう。一九三五年と言えば満州事変（一九三一年）からやがて太平洋戦争へと突き進んでいく「一五年戦争」の最中の時代だっただけに、そうした思いが『雪国』に込められていたと考えられる。

開かれた文章で聞き手あるいは読む人の想像にまかせつつ、世

界を共有できるのは素晴らしい。そこには対話がある。それは、相手がいないと話しができないし、文章を作れない敬語だらけの日本語を考えれば当然のことかと思う。そこには、見るもの聞くものを対象化し、冷静に客観的に論理的に描写する、話し手あるいは書き手の一方向的な主張、場合によっては押しつける態度はない。文章それ自体は自立的ではなく、他者依存的である。状況依存的である。対者あるいは状況への配慮は欠かせない言語である。

こういう言語には「はじめに言葉ありき」という発想はない。人間の言語が社会をけん引する力をもった言語ではない。自己主張は弱い。こういう言語は、季節を告げる鳥の声のように、あるいは川のせせらぎのように、自然の声である。そういう言葉は感動を呼び起こすが、論理で世界をリードする力はないのではないか、と思う。

ヨーロッパ語と日本語の違いを如実に表したのが、川端の文章とその英語訳であった。The train…は事実を客観的に表現した文章であり、読者はその情報を受け入れるだけである。このような文章を日本語やインドネシア語でできないわけではない。だが、主語と述語をきちんきちんと入れた日本語の文章はどことなく事務的で殺風景で、素直ではない。

ただここで付け加えておきたいのは、事務的で殺風景ではあっても、「神の視点」的な表現がこの言語には可能である点である。他方、ジャワ語では不可能であるからその比較を通して両者の違いが見えてくる。日本語の「神の視点」的表現の例は、例えば「わかる」という言葉があるのに「理解する」という言い換えがあるし、「見る」という言葉があるのに「観察する」という言葉が、「要る」があるのに「要する」が、「ある」という言葉があるのに「存在する」が使われている事実を挙げることができる。これらは「神の視点」的な表現といってよいだろう。興味深いことにこれらの言い換え語が漢語に「する」を付けた造語だということである。ジャワ語の場合もサンスクリット語を採用して言い換えることがあったが、筆者が知る限り、たとえば染谷一九九三：三二二で紹介したように、それらは美化語的な丁寧語であり、客観的表現ではなかった。日本語とジャワ語の違いを知るうえで実に興味深いのだが、ここではこれ以上には立ち入らず、いずれ別の機会に論ずることにしたい。なお、ジャワ語を話すジャワ人にとってはインドネシア語もあり、そのインドネシア語に「神の視点」的な表現が可能であること、それがジャワ語に客観的表現を不必要にしているのかもしれないことを付け加えておこう。

日本語が、感情を容れて場の空気を取り込むあまり、客観的事

実を軽視しがちになるのも不思議ではない。フクシマ原発事故では水素爆発を恐れて原子炉への海水注入を中断したと報道された。それが事態を悪化させたのではないかと国会で追及された。ところが、ＩＡＥＡの調査団が調査することになったのを受けて東電は前言を翻し、中断しなかったという「事実」を表明した。官邸の空気を読んで「中断」したと発表したのは間違いだったというのである。彼らにとって大事なのは、事実よりも社会（この場合は官邸）への配慮だったのだ。

客観的事実を大事にするという鉄則が守られないのは、悲しいかな、日本の「伝統文化」のようだ。日本とアメリカの軍事力の明らかな差にもかかわらず、戦争に突入していったかつての日本、バブル経済を止めることができなかったかつての日本、主観に流され、「空気」に流され、客観視できないのは今も変わらないのである。

オモテとウラ、タテマエとホンネ、「ちょっと」と「いいえ」

聞き手や読み手に開かれた対話的な言語では、一方的な自己主張や押しつけは生じにくい。常に心がけることは友好な関係を維持することである。それがオモテとウラ、タテマエとホンネの乖離を生み、往々にして前者がまさるのも当然だろう。

断言を避けるという点にそれが見えることはすでに述べたが、「ちょっと」ということばにもそれはうかがえる。友好関係を維持したいという気持ちからだろうが、日本語ではあからさまに「いいえ」というのを避ける。その代わりに「ちょっと」をたくさん使う。「ちょっと」なのだから文字通り「少し」の意味かと思うと、誤解のもととなる。実は「いいえ」なのだ。「ちょっと違うんですね」は実は「全然違う」つまり「いいえ」なのだ。

インドネシア語やジャワ語でも同じである。「いいえ」は、インドネシア語ではtidak（口語ではnggakともいう）、ジャワ語ではora（オラ、普通語）やmboten（ボーテン、丁寧語）だが、それよりも、kurang（ジャワ語の丁寧語ではkirang）が実によく使われる。文字通りには「少ない」の意味で日本語の「ちょっと」と似ている。ジャワ人の人類学者であるマルバングン・ハルジョウィロゴは「上司に向かって「いいえ」というジャワ人の部下はいまだかつていなかった」と言いきり、「ボーテンという言葉はジャワ社会では礼儀上存在しない」ともいう（マルバングン・ハルジョウィロゴ：一八）。実際にジャワの人々の会話を聞いていると、oraやmbotenはよく耳にする。しかしほとんどの場合、深刻な事態を引き起こすような場面ではない。これら否定や拒否を意味する語は深刻な事態を引き起こしかねない場面では

kurangやkirangなどを使って和らげているのである。

人の目が怖い日本人とインドネシア人

「まず他者ありき」の文化では他人の目、他人の耳は怖いものだ。「人に見られたら恥ずかしい」や「人に聞かれたら困る」は毎日どこかで使われている言葉である。いうまでもなく、ここでいう「人」とは「他者」の意味である。東電にとってIAEAはその怖い他者だった。ということは日本の国民は怖くなかったということになる。（隠した情報は）隠し通せると思っていたに違いない。

他者が怖いのはインドネシアでも同じだ。（人に見られたら）malu（恥ずかしい。インドネシア語）という言葉は、インドネシアで何度も何度も耳にしたものだった。母親が抱いた子供に向かって（ジャワ語で）isin isin（恥ずかしい、恥ずかしい）といった姿を何度も目にした。インドネシアの人々にとっても他者は怖い存在なのだ。しかし彼らの多くはムスリムであり、クリスチャンだ。彼らにとっては神もまた悪事を許さない怖い神のはずである。だとすると、彼らが怖がるのは神と人（他者）の両方で、多くの日本人よりも恐れるものが多いということになる。多くの日本人にとって神は頼めば恵んでくれる神であり、悪事を裁く神ではない。閻魔を怖がる日本人はもういないのではないだろうか。

「考える」より「思う」の日本人とインドネシア人

「考える」と「思う」はどちらも人間の精神の働きだから、同じような意味で使われてもおかしくはない。「こうしようと思った」は「こうしようと考えた」と微妙な違いがあるものの、ほぼ同じだと「考え」てよい。しかしよく「考え」てみると、かなりの違いが見えてくる。言語学者の大野晋はその著書『日本語練習帳』でデカルトのコギト・エルゴ・スムを「我思う、ゆえに我あり」と訳すのは不適切で、「我考う、ゆえに我あり」とすべきだという（大野：八―九）。「思う」というのは、「あることを心に抱きもつ」という意味であり、感情的で主観的なのに対して、「考える」は、「筋道に沿って論理的に結論づける過程」をいう。「いろいろなことを考え合わせる」というコギトがもっている意味を考えると、それは論理的思考に他ならず、感情ではないから「思う」という訳語は、確かに、不適切である。

日本人は「考える」より「思う」を多く使うのではないか、と「思う」。なぜだろうか。論理よりも感性を重視する文化の持ち主だからだと、私は「考える」。

それだけではない。「思う」という言葉を発するときには控え目な感覚がつきまとうのに対して「考える」は積極的な感覚があるから自称詞につなげて使えば自己を押し出すことになる。「私は…と思います」といういい方と比べると「私は…と考えます」は自分の頭を使った結論を前面に押し出す感覚がある。もちろん自主性がある。しかしそれが「まず他者ありき」の文化では嫌われる。「考える」よりも「思う」のほうが無難なのである。「まず他者ありき」の文化では自己を押し出す態度は嫌われる。それに対して自己をへりくだらせる態度は賞賛される。「…させていただきます」という言い方にそれは明らかだ。同じ人間の精神の働きでありながら、「思う」と「考える」では情緒的な働きと理性的な働きという違いがあった。

インドネシア語にもジャワ語にも同じような言葉がある。kiraとpikirである。kiraは「推測する」「気がする」という意味で主観的で感情的な「思う」に近い。それに対してpikirは「考える」という意味が強い。「(他者に) どう思われるか」というときに使われるのは、(受動を意味するdiを付けた) dikiraであり、dipikirとはいわない。このdikiraもまた何度耳にしたことだろうか。

日本とインドネシアは異なった信仰で独立を目指した

明治の開国以来、日本は、押し寄せる西洋列強に対抗すべく、西洋列強から科学技術を取り入れた。日本人には西洋列強の優れた科学技術は何ものをも可能にする強力な「武器」と受け止められた。それは「文明」と呼ばれ、目指すべき理想として信仰の対象となった。近代科学技術が「神の視点」の言語文化と強く関連していることは既に見た通りである。その科学技術信仰が盲信であったことに気づいたのがフクシマ原発事故のときであった。日本の科学技術は信頼できるから絶対安全というのが盲信であったと知ったのは、「安全神話の崩壊」という言葉によく言い表わされている。

とはいえ、これ以外に信じるものはないから依然として日本人は科学技術の進歩に期待するであろう。キリスト教やイスラームといった世界宗教は多くの日本人には無縁であり続けるだろう。そして古来の神道や仏教は日本人にとって科学技術を補佐する宗教いわゆる「ご利益宗教」にとどまるであろう。だとすれば、日本人はきわめて物質主義的な思想の持ち主であり続けることになる。それは、GDPの多寡に幸福度を見ようとする見方に表れ、その上下に振り回される。資源のないことを憂慮する。日本人には大量に降る雨、あちこちにある火山、国土の七〇%を占める森

林、四方を囲む海、二つの海流が交錯するために生まれる豊富な魚介類は大きな資源だったはずである。しかし、科学技術に立脚した工業国を目指したために過剰な人口を抱えることになり、資源は不足することになった。そこで、大量の物資を調達しそれを加工して外貨を稼ぐ以外に生きる道はないという貿易立国を目指した。それは西洋列強に取り囲まれた恐怖感から生まれた神話であった。道を間違えたのではないか。確かに、西洋列強は、ミアーズがいうように、「暴力と貪欲が基準であり、正当である」国際社会（ミアーズ：一一九）を造り出し、それを主導していたから、日本がそうした神話をもっても当然だった。しかし西洋列強が日本に押し寄せたのはその背後にある中国に進出するための燃料と物資の補給基地の価値があったからだけである。彼らが本当に狙ったのは広大な領地と多大な人口と豊富な資源をもつ中国だった（ミアーズ：一〇九―一一〇）。だとすれば、西洋列強に対する対処の仕方には他の道があったのではないか。とはいえ、「文明」の名で語られる近代西洋の「暴力と貪欲」は今なお続き、続いているどころかさらに強まっているのだからそれに対抗しなければ生きる道はないことも確かである。「文明」というきれいな言葉で語られる（広義の）「文化」[6]の背後あるいは根底には「無情残刻」が渦巻いていたし、今もなおその「無情残刻」は消えるどころか激化しているのである。「文明」に惑わされてはならない。根が「虫の視点」の言語文化である日本がそれにどう対応できるか、は実に大きな課題だが、それはインドネシアにとっても同じである。インドネシアだけではない。アジア諸国の言語文化さらにはアフリカやラテンアメリカも同じであり、今後の世界文明の構築に力を合わせる必要がある。

科学技術を信奉する国では労働力を提供でき、自立できる人間が受け入れられる。そうでない人間は棄てられる。現代日本では、会社が倒産したために新たに職を求めたとしても四〇歳を越えれば職を得るのはほとんど絶望的である。そうした人たちには生活保護というセーフティネットが整備されているが、これを受けようとしない人がいるという報道があった。「国の世話になるのは恥ずかしい。負い目を感じる」というのがその理由である。福沢が推奨した自立精神、独立精神が縛りとなっているのである。「虫の視点」の文化では他者依存、したがって相互依存は当然だった。しかし彼らにとってはすでに過去の文化となってしまったようだ。科学技術を信奉する「神の視点」の文化が生んだ「無情残刻」の一つではないだろうか。報道では地域のコミュニティ作りが必要と提言していた。しかしそれができていないとも付け加えていた。高いレベルの科学技術も社会作りは苦手らし

い。

インドネシアは一九四五年八月一七日、長かったオランダと日本の支配から解放され、建国五原則（パンチャ・シラ、Panca Sila）を掲げて念願の独立を達成した。建国五原則の第1条が「唯一至高の神（Ketuhanan Yang Maha Esa）」である。そこでいう神が一神教の神であることは言うまでもない。独立当時すでにインドネシア人の多くはイスラム教徒だったからイスラームの神を意味していたことは間違いないが、インドネシアにはカトリック信者もプロテスタント信者もヒンドゥー教や仏教の信者もいたから、国民融和のためにそれらイスラーム以外の宗教の神も意味していた。ヒンドゥー教や仏教の神がイスラームやキリスト教の神と並列できるかどうかについて、ここでは立ち入らないでおくが、ともかくそれらの諸宗教の信仰心を基礎に独立を図ったのであった。科学技術立国の日本の独立とは対照的だったといってよい。もちろん明治期の日本が国家神道を基軸に立国した面を見れば、一見、共通しているかに見えるが、日本の国家神道は科学技術立国のための方便として利用されたに過ぎない。「ご利益宗教」である。神道には全ての人類に示せる普遍的基準はないから国家に対しても国民に対してもそれを示すことができない。世界宗教であるイスラームやキリスト教とは大きな違いがある。

イスラームの神アッラーは「神の視点」の神そのものといってもよい。全知全能の絶対的な神である。イスラームとはアッラーへの全面的委嘱を意味する。だから彼／彼女がアッラーにのみ従うというのであれば、他人に依存する必要はないことになる。実際には、ジャワ人の多くの心はイスラームだけに覆われているわけではない。イスラームが到来する以前のヒンドゥー教や仏教あるいはそれ以前から信仰されていた土着の宗教も依然として強く人々の心を捉えているから、旺盛な相互扶助精神に見られるように、他者依存は弱くはないが、それでもイスラーム信仰の力も決して小さくはない。

いまここで両国の違いの詳細を論じる紙幅はないが、著しい違いがあることだけを述べておこう。現在インドネシアにはたくさんの日本人が住んでいるが、彼らは、一様に、一日五回礼拝を行うイスラム教徒、一か月ほど続く断食月は日中、食べるものも飲むものも口にしないイスラム教徒、ジルバッブ（スカーフ）を被る女性のイスラム教徒に驚く。日曜になればどの教会も信者で溢れるキリスト教会を見て驚く。インドネシアに溢れる宗教心に驚いているのである。宗教を日常生活から排除してしまった日本人ならば当然だろう。いうまでもないが、同じイスラム教徒でも民族差、地域差、個人差があるが、国民全体が「唯一至高の神」の

もとで生活しているという事実は大きい。

科学技術を信仰した日本人と一神教を信仰したインドネシア人。前者は物質重視に傾けば、後者が精神重視に傾いたとしても不思議ではない。どちらもバランスを欠いているようだ。両者が互いの違いを、見下げるような態度ではなく、むしろ見上げるような態度、つまり尊敬する態度で見る必要があろう。そうすることで、自らにあるものも欠けているものも見えてきて、幸福のための方途を見出すことができよう。ただ、筆者が知る限り、インドネシアの人々は一般に日本人に敬意を抱いているから、むしろ日本人の側が問題であるように筆者は考えている。そのためには科学技術信仰に傾いた自らの世界観や価値観をまず見つめる必要があるだろう。

思えば、明治の開国以来、西洋列強の「無情残刻」は余りあるものであった。戦争に明け暮れた近代西洋にとってその「無情残刻」は日常茶飯事だったに違いない。しかし日本を含む非西洋にとっては異常であった。彼我の違いから余儀なくされた一五〇年間の辛苦にも関わらず、辛うじて独立を全うしてきただけでも日本は賞賛されるに値するといえよう。もっとも、戦後の占領軍支配やそれに続くアメリカの支配を考えると必ずしも独立を全うしたとはいえない。だからこうしたいい方にはためらいを覚えるのだが。

日本は、そしてたくさんの非西洋諸国は、ますます「神の視点」の言語文化を取り入れ、近代化に邁進し、激化する国際的な勝ち残り競争で生き残りを図るだろう。しかしそれは地球をますます疲弊させるだけであり、その結果は共倒れに至るということに気づかなければならない。かくて「神の視点」の言語文化は終焉し、「虫の視点」の言語文化が力を発揮しなければならないと考える。

英語をはじめとしたヨーロッパの言語は、日本語やインドネシア語やジャワ語と比較すると、つくづく人工的な言語だと思う。規則（文法）を決めてそれに厳格に従おうとする言語という意味である。一つの文章には必ず主語がなければならないというしばりから苦し紛れに意味のない it や there を立てて文章を作るなどというところにもそれをうかがうことができる。金谷はそれらを「馬鹿主語（dummy subject）」と呼んでいる（金谷二〇〇四：一七四）。そういう英語に比べると、日本語やインドネシア語やジャワ語はなんと自由な言葉だろうか。

私はこうした自由さ、自然さがこれからの文明に必要だと考えている。文明そのものが人工物なのだが、二一世紀の現代に至ってその人工性がますます強まり、自然を破壊し始めていることは

誰の目にも明らかとなった。そして危険だと誰もが感じている。そういう文明ではこれからの生存は難しいのではないかと誰もが感じている。自然を大事にする文明に変えなければならない。トインビーは「母なる大地の子である人間は、仮に母を殺す罪を犯すなら、それ以後生き残ることはできないであろう。この罪に対する罰は、みずからを絶滅させることであろう」（トインビー：四二六）とか「人類は母なる大地を殺すのであろうか、それとも救うのであろうか。人間は、その増大する技術力を悪用することによって、母なる大地を殺すこともできよう。あるいはまた、人間自身を含めて全ての生物が、偉大な母から生命を与えられた代償として得た自殺的で攻撃的な貪欲を克服することによって、母なる大地を救うこともできよう」（トインビー：四三七）と述べて人類に警告を発した。自然を破壊する現代文明の問題点を鋭く突いた言葉であった。現代文明は本稿でも紹介した「神の視点」の文明であり、その弊害が日増しに強まっていることを考えると、それに代わる文明が求められよう。そのために、日本語やインドネシア語やジャワ語を使う人たちがもっている感性が必要だと私は思う。自然を大事にする文明。今、そうした文明を模索する時期にきていると考える。

二つの視点が重層化した日本語とインドネシア語の価値と役割

本稿では、日本語、インドネシア語、ジャワ語に「虫の視点」が共通して見られることを強調してきた。そのために、「神の視点」についてはほとんど触れることはなかった。だが、学術論文一般の例にもれず、本稿の日本語はどう見ても「虫の視点」の日本語とはいえない。ほとんどそのまま英訳できそうな日本語だといってよいだろう。これは、興味深い事実である。日本語とインドネシア語は、「虫の視点」と「神の視点」の両方が見られるのである。いうまでもなく「虫の視点」が基礎構造をなす。そして「神の視点」が上層構造をなす。基礎構造はまさに基礎だからこれが揺らぐことはない。依然としてこの言語を使う人々の考え方（文化）を規定する。とはいえ、日本語は明治以来、欧米語の影響に曝されたこともあり、また、民主主義社会の形成にも関係し、「神の視点」的な言語が創造されてきた。インドネシア語も同様である。七〇年ほど前の独立に際して国語・共通語として採用されたインドネシア語は今もなお創造、発展の最中にある言語である。不特定多数の読者ないし「聞者」を対象にしたメディアの文章にそれを見ることができる。[7] ただジャワ語にはそれがない（必要がないからだろう）。

英語のように、主語（のような語）を設定し、述語を続ける文

章を作ることができるのである。たとえ日本語らしくない、あるいはインドネシア語らしくない言い回しであったとしても、意味が通じるならば日本語あるいはインドネシア語と認められてよいはずである。すでにいくつかの例を挙げたが、例えば「私はあなたを愛します」という例も挙げておこう。この日本語は、確かに日本語らしくない。だからこのような言葉を交わし合う恋人同士や夫婦がいるとは考えられない。しかし、たとえその意味が十分理解できているかどうかの保証はないとしても、表面的には理解できる。日本語と認めてよいのではなかろうか。

このように見ると、日本語やインドネシア語は特異な言語ということになろう。だとすれば、その特異さを存分に発揮しないでよいはずはない。これら二つの言語文化はそれぞれ「虫の視点」の伝統の上に立って、表層のレベルであろうとも、「神の視点」によって、近代化、「国際化」、「世界化」を図っているのである。そうした重層言語は大きな役割を課されていることになる。上層の「神の視点」の言語文化によって独立精神の確立に努め、世界との交流に努める一方、他方で基底にある「虫の視点」の言語文化によって新しい文明の形成に貢献していく。簡単ではないが、可能なはずであり、それができる言語として力を発揮するのが使命だろう。

結論

「虫の視点」の言語文化が「独立」や「自立」の精神と相容れないことは明らかである。明治初期の福沢の提言にもかかわらず、一四〇年近く経った今もなお、付和雷同と言われても仕方がない態度、「寄らば大樹の陰」とばかりに大企業へと流れる若者の安定志向、大国アメリカに引き回される追従外交などを見れば、依然として福沢が掲げた理想からは遠いと言わざるを得ない。「神の視点」の言語文化を取り入れながらも、基本的には「虫の視点」の言語文化の持ち主である日本人にしてもインドネシア人にしても試練はまだ続く。

とはいえ、（民族語のジャワ語はともかく）日本語とインドネシア語は「虫の視点」と「神の視点」の両言語文化を重層的に併せもつ言語であることに注目すれば、これらの言語に大きな可能性を見出す。一方で、独立精神の涵養、世界の諸民族との交流にその力を発揮する一方、他方で、行き詰まりを見せつつある現代文明を救済するという可能性である。

注

（1）自称詞とは言語学者の鈴木孝夫の造語である。ヨーロッパ語の「一人称代名詞」は日本語の言語的事実とは相容れないとして自分を指

す言葉を一括して自称詞と呼んだ。鈴木孝夫一九七三：一三〇―一三五を参照されたい。インドネシア語やジャワ語も同様である。

(2) 対称詞も鈴木の造語である。詳しくは鈴木：一三四―、を参照されたい。

(3) かつて私はこの aku が対者を低く位置づける対称詞と理解し、対等な者同士の対称詞はないと考えていたが（染谷一九九三：五七―）、その後、いろいろ調べた結果、むしろ対等な位置にある友人同士で使われていると考えるようになった。ここで訂正しておく。

(4) 個人名を自称詞としても対称詞としても使えるという現象、つまり自他の区別がないというのは日本語と同じで非常に興味深い。Bapak などの親族名称（親族呼称）は「父親であること」を明示する言葉として固有名詞的な性格すらもっていることになる。「固有名詞」であるならばそれは自らを指す時にも使えるし、相手を指す時にも使える。ただし、そのとき、その会話に立ち合う人は「父親」である。実際の父親でなければ、「父親のような人」と規定されることになる。

Bapak など親族呼称は正式な形よりも簡略形がよく使われる。Bapak や pak は都会でも田舎でも普通に使われるが、ibu は都会で使われ、mbok は田舎で使われる。mas も kang も「兄」を意味する。正式には kakangmas でその後略系が kang で前略形が mas である。mas は一般に都会で、kang は田舎で使われる。「姉」を意味する mbak と yu も同様で、正式には mbakyu で mbak は都会で、yu は田舎で使われる。その他、父呼称、母呼称、伯父叔父呼称、伯母叔母呼称、祖父母呼称も同様である。詳しくは、染谷：一九九三を参照のこと。

(5) se ve の ve は ver（見る）の三人称単数が主語のときの活用形。se は三人称単数の再帰代名詞。la は女性名詞につく定冠詞。montaña は「山」。この文章は直訳すれば「山が見られる」だが、「山が見える」と訳してもよい。

(6) 筆者は「文化」を広義の「文化」と狭義の「文化」に分けて考えている。広義の「文化」とは「後天的に獲得した行動様式」を意味し、狭義の「文化」とは「文明」の一部で「精神文化」と「技術文化」の二領域からなると考える。その「文明」とは「文化・政治・経済・社会の複合体」（染谷二〇一〇a：七二―、染谷二〇一〇b：八五―）である。

(7) たとえば、Presiden Susilo Bambang Yudoyono mengatakan bahwa harga BBM harus naik（スシロ・バンバン・ユドヨノ大統領は、石油燃料の価格は上がらなければならない）という最近（二〇一二年二月二八日）、Kompas 紙で見かけた見出しを例に挙げてみよう。ここで使われている mengatakan（語る）は、日常会話ではまず使われることはない、論文用語である。この文章はそのまま英語に翻訳できるインドネシア語で「神の視点」的表現といってよい。

参考文献

Biro Pusat Statistik, *Statistik Indonesia*, 1976

Biro Pusat Statistik, *Penduduk Indonesia*, 1983

福沢諭吉『文明論の概略』岩波書店、一九九五

福沢諭吉『学問のすすめほか』中央公論新社、二〇〇二

金谷武洋『日本語に主語はいらない』講談社、二〇〇二

金谷武洋『英語にも主語はなかった』講談社、二〇〇四

マルバングン・ハルジョウィロゴ（染谷・宮崎訳）『ジャワ人の思考様

式』めこん、一九九二
ミアーズ、H（伊藤延司訳）『アメリカの鏡・日本』角川書店、二〇〇五
森野宗明「古代の敬語II」、辻村政樹（編）『講座国語史—敬語史』大修館書店、一九七一
森田良行『日本人の発想・日本語の表現』中央公論社、一九九八
大野晋『日本語練習帳』岩波書店、一九九九
染谷臣道『アルースとカサール—現代ジャワ文明の構造と動態』第一書房、一九九三
染谷臣道「自立する文明にどう対処するか？ ポスト文明に向けて」、『比較文明研究』第一五号、麗澤大学比較文明文化研究センター、二〇一〇a
染谷臣道「文明もまた還流の道を」、『比較文明』二六、比較文明学会、二〇一〇b
鈴木孝夫『ことばと文化』岩波書店、一九七三
辻村敏樹「『貴様』の変遷」、『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂、一九五三